

書評

森本 泉『ネパールにおけるツーリズム空間の創出—カトマンドゥから描く地域像—』

東京：古今書院、2012年、334頁、6400円+税、ISBN 978-4-7722-6112-8

藤倉達郎

「夜、カトマンドゥで最も明るい場所といえば、ツーリズム空間、タメルであろう」と著者、森本泉は書く(87頁)。近年、停電の多いカトマンドゥの中にあっても、多くの店舗が自前のジェネレーターを用意しているため、一帯が真っ暗になることはない。タメルには外国人向けのホテルが立ちならび、インターネット屋やベーカリー、世界各国の料理を出すレストランやバー、雑貨屋など、ツーリストが必要とするものはほとんど揃っている。1990年代からタメルに何度も滞在した評者がよく利用したのは、日本語で「日本語の本、20,000冊あります」という看板を出している古本屋である。店の主人は、周りの人たちに「パキ」と呼ばれているおじさんである。店内には看板どおり、大量の日本語の文庫本が置かれている。1冊、日本円にして数百円で、読み終わってから持っていくと売値の半額で買い取ってくれる。パキは片言の日本語を話す。漢字は読めないが、人気のある作家の本は、名前の文字のかたちでなんとなくわかるという。店内には英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語等の本もあり、例えばドイツ人が来るとドイツ語で、イタリア人にはイタリア語で対応する。最近あまり見かけなくなったが、タメルの路上で10数ヶ国語を操りながら土産物を売ったり、観光ガイドを申し出たりする少年たちもいた。タメルは一見、香港やバンコクの安宿街と同じようなツーリズム空間—「どこにでもある場所」／「どこでもない場所」(v頁)に見える。しかし、「このような「どこでもない場所」の景観、あるいはツーリズム空間の表層をめくれば、どのような地域が顕われてくるのだろうか」(Ⅷ頁)。そして、「ツーリズム空間の創出過程を明らかにすることを通じて、ある地域がいかに世界経済に取り込まれ、変容されたのか、より動態的に、そして終わることのない変化の過程として描き出すことが可能なのではないか」(Ⅷ頁)と著者は問う。

本書は全9章からなる。第1章で研究の目的と方法が述べられる。ここで著者は地理学における「地誌の終焉」をめぐる議論に触れる。古典

的なスタイルの地誌がまったく「おもしろくない」といわれる時代状況のなかで、例えば、一般社会や若者たちに「共感をともなう地域理解」を浸透させるような地誌の作成、という目標が提案されてもいる。しかし、著者はこの呼びかけに「違和感を禁じ得ない」という。それは第一世界に住む著者が、第三世界について研究する場合に「本質的に含まれる権力関係」の故であると著者は言う。(著者のこの「違和感」については後でまた論じる。)本書で著者が目指すのは、「外部世界との関係の中で創出され、動態的で閉曲線で囲うことのできない地域」を描くことである(3頁)。第2章においては、この「外部世界」との関係について、ウォーラスタインの世界システム論を援用し、中核・周縁関連の中からツーリズム空間が創出されるという枠組みが提示される。第3章ではネパールがこれまでどのような地域として描かれてきたか、そしてネパール社会からそれに対してどのような反応があったかが概観される。とくにカーストと民族からなる階層社会としてのネパールのあり方に焦点が置かれる。この章は、最近のネパール研究への入門的概説としても有用である。第4章はネパールがどのようにしてツーリズムの目的地として形成されてきたかを概観する。西欧世界における「シャングリラ」イメージの形成と変遷についての記述がとくに興味深い。第5章以降において著者自身の長年の現地調査に基づく記述と分析が展開される。調査の中心となるタメル地域は、旧来のカトマンドゥという都市の北西のはずれにあたり、1950年代までは、鬱蒼とした森林に囲まれ「ブート(幽霊)がでる」といわれるような場所であった。第5章ではこの場所がツーリズム空間へと急速な変貌をとげるまでの歴史的経緯が述べられる。第6章はタメルにおけるホテル産業の形成と変化を論じる。ここではホテル産業に参入した様々なカースト・民族的背景を持つ企業家たちの姿がとくに生き生きと描かれている。第7章は読者の視線をホテルから路上へと導く。そこで活動するのは楽師カースト、ガンダルバである。もともとサランギという弦楽器を持って村々をまわり、歌をうたうことをなりわいとしていたガンダルバたちが、あるとき、観光客にサランギを売って収入を得ることができることを発見する。第8章ではタメルでの外国人観光客とのやりとりを通して、アイルランドで移民労働者として働く機会を得た2人のガンダルバの事例が詳しく述べられる。終章である第9章において、著者は本書で論じられたグローバル、ナショナル、

ローカルの3つの次元の関係を再確認しつつ、それらがタメルの企業家やガンダルバたちにとって持つ意味をあらためて考える。

本書の全体を通じて、「イメージ」についての記述と議論が繰り返し登場する。それらは「シャングリラ」や「ネパールの真正な伝統」について旅行者が抱くイメージであったり、また様々なカーストや民族集団についてネパール社会に広く流布するステレオタイプのイメージであったりする。それらのイメージはツーリズムを通して人や金の流れをつくり、また人々はみずからに当てはめられたイメージを創造的に解釈したり、利用したりする。さらに、見る側と見られる側という役割がいつも固定しているわけでもない。著者はタメルを（そしておそらくタメルを含むさらに大きな世界を）他者をめぐるイメージが「交わり合う場所」として描く。例えば、外国人旅行者がタメルの路上でサラングを持つガンダルバに、素朴で前近代的なネパールのイメージを見ているとすれば、その旅行者を見つめかえす若いガンダルバは、外国人と親密になり、やがて国際結婚をして先進国で安楽に暮らす将来を夢想しているのである（227頁）。

本書は世界システム論を援用しているが、世界システムそのものの性質や動態を正面から論じることが、もちろん、していない。しかし著者のいう中核-周縁関係や、世界システムが創出する差異がどのようなものであるのかは、個別具体的な記述のなかから浮かび上がってくる。タメルで知り合った外国人の支援のもとアイルランドに行くという「幸運」を実際に手に入れたラムジ氏とヒラルル氏は、まずパスポートや様々な書類を作成するという課題に面する。著者はアイルランドに行くまえに故郷ラムジュンの村に戻る2人に同行する。学校に通ったことのないラムジ氏が、入国審査の際にちゃんと署名ができるようにと、著者は彼と一緒に地面に木切れで文字を書く練習をする。アイルランドに行ったラムジ氏とヒラルル氏はパブで働きながら、ときどきサラングを演奏する。繁忙期にはポーランドからの出稼ぎ労働者たちもパブで働くが、ヒラルル氏たちの受け取る給与は、それら白人労働者に比べてはるかに少ない。それはヒラルル氏たちがカーロ・マンチェ（肌の色の黒いひとたち）だからである。しかしそれでもネパールにいるよりは多く稼げる。著者は後にアイルランドにその2人を尋ね、ラムジ氏とともにアイルランドの田園風景を眺める。ラムジ氏は、その風景がラムジュンの村の風景と

さして変わらないのに、なぜアイルランドにはビカース（発展）があって、ネパールにはないのか、と問いかける。著者には返す言葉が見つからない。ラムジ氏と著者のなかにある原風景があまりに違うため、同じ景色もまったく違って見えているのだ、と著者は感じる（274頁）。そしてこのような違いの認識が、「共感」という言葉に著者が強い違和感を持つ理由である。しかしながら、著者の姿勢は一貫してラムジ氏やヒラル氏のようにタメルに生き、タメルを通して世界と関わっていかうとする人たちに寄り添おうとするものであり、彼らの肩越しに世界を把握しようとするものである。そしてその視点を通して、著者はツーリズム空間の表層のかなたにある、ダイナミックな地域像を描くことに成功している。

このように本書はネパールやツーリズム空間に関心のある読者に強くお勧めできる良書である。ネパールのツーリズムについては、本書にも引用されているマーク・リークティが、その創成期やヒッピー時代にまで遡って、当時のツーリストや外国人企業家たちのしばしば奇妙な履歴も追いかけるかたちで調査を行なっている（例えば Liechty 2012）。本書と合わせて読むと、ネパールにおけるツーリズム空間の創出の過程がさらに立体的に浮かび上がってくるであろう。

参考文献

Liechty, Mark, 2012, The “Age of Hippies”: Nepalis Make Sense of Budget Tourists in the 1960s and 1970s, *Studies in Nepali History and Society*, 17-2, pp. 211-262.

ふじくら たつろう ●京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授